

談國

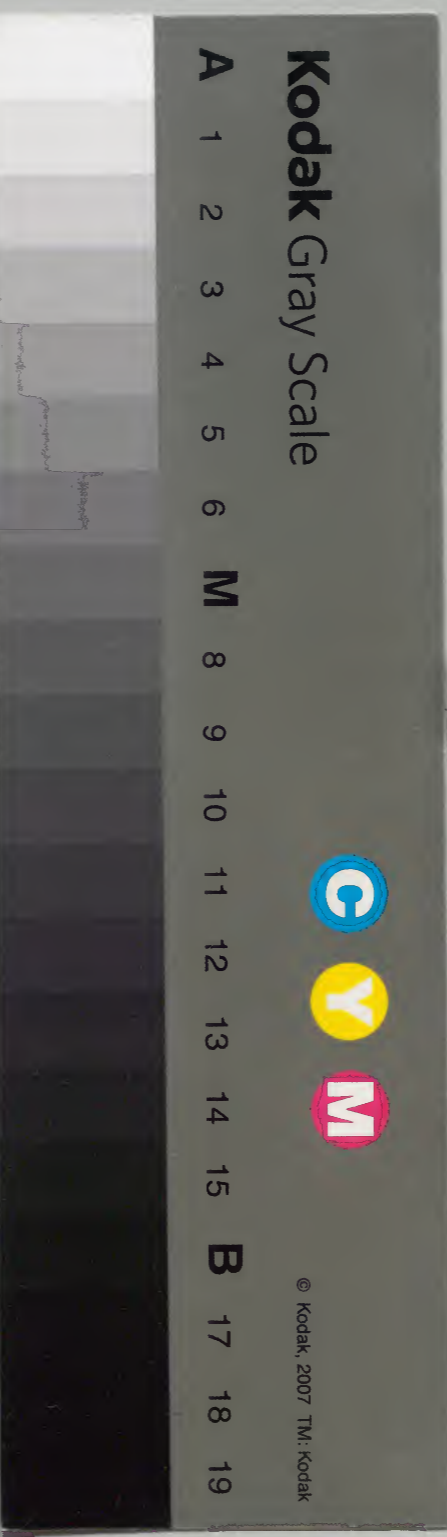
東遊記

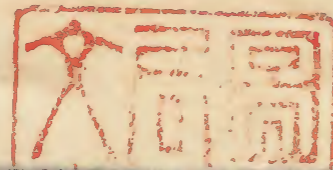
二

庫文閣内	
毛	三九四三
函	一〇
架	四〇
冊	冊

内閣文庫	
番號	和 29423
冊數	20 (2)
函號	172 87

内二〇九二號





東遊記卷之二

松之刺の津波

内一〇九一號

堀氏文庫

奥州あづま松之刺まつのかきの津波つなば
 少くも其その同どう終はつつとと多た量りょうにに過すりますまとと山やま々々乃の
 鼻はなのの條ぢょう々々とと水みづ々々とと口くち里り斗と々々とと連つら々々とと
 代よ々々とと金かね々々とと遠とほ々々とと一い夜やけけ家いへののととききああらら
 のの先まへ人ひと々々ああららめめままはは家いへ内うちのの祖ぢい父ふ祖ぢい母はは保たもちち其その集あつままりり
 圍い炉ろ表あららははままはは括く々々とと口くち方かた山やま々々物もの結むす々々ととにに
 彼かの者もの其その津つ々々りりとと相あ々々とと廿に二に十じゅうとと年ねん々々とと松まつ々々乃の

東遊記 卷之三

花道家文庫

方とてやアとてしるし其白あしく雷は山からた
 もの遠くアとてあまると又婦もきかるとの海
 よ出まるとしとていふらよだんく小をきりま
 ころくをく見えし崎山のことお然しくあるとる
 に大浪乃あまるとす津波をきとてあゆむ老
 若男女我とていふとて途迷ひしとてあはしく方に
 おあす下民屋田烟草本禽獸ますく少くもあはれ
 海危れみくらとてあはれ生あはる人民海邊の村里
 あはれ人ともふく我くも遠くもあはれ浪敷千

里は沖よりあはれ其島まてくあはれとてあはれ
 近は浪とあまるといふとてあはれとてあはれ
 あはれあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 愛あはるるあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 川あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 海あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 えとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 海國の脚の附石見はあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

小枚乃感

越中の小杉よりふふ山崎へ三月九日
 北國のなみち路へ積り雪よけし途へ是
 暮ふふに東山二人歩むる雨合羽は
 破色し御伴おうけかごとく破れぬ
 持しあまねぬ荷物おけごとく
 歩むるはありしはありし
 人目うち合々合々合々合々合々合々
 くは先さあけつるまきおし心け違は
 万世と見え

新多



丁四斗なる里傳乃本條のりく入の語るるかげ
じに義と音一 崗路申少くさげはおうさく
ゆるるあると呼ぶけ小杉への道おへてへとよ
よ我もそ方一坊者なる語をなすしあめあへて是よ
はゆ跡もほじき里斗もゆは波里のゆ
の人まづくゆのいげへ報一ゆふや又何の困よる
流ふ余多くと我ハ都づくの醫者なりるが山乃
交へ志くまうそと一山ハゆふりゆと一
波地よ遠るも志流らんや一詞をゆふくはさ一

是よも道一りそるは波里のよけさふふと
美よといゆふ一それ人まらんばるるを肝要
とさたらも海くあんト下りすくと山に足は海
流る山ハ盤冒の地なると種よくあり付七おめ
下り馬一系云格くる醫者都方より毎山一
平めいしはけ人まらんばるる強く醫者もさしわく
其家業大よりとそとそさしハ所醫者より
技持とよする場りの目さ師ハ盤冒より是よ
七まんがりのよきさるりさるとちと云格先種ふ

世に於てはもたゞの如くは付物もあやもあやも
 色く乃正なるよひのり子めももる上りしをんが
 一も一とらる然ししくり相とあんたる人
 いも教のしとくきま一しつひもけし種なく
 小形も初り思ふ茶室よあし体ふよ彼男も同
 しく体居く被るもつひしとくぬ又とる人
 一しくつひも教を立成もあつ魚へかき門人書
 新初よりすぬ教もく抄りしつあありななく小
 ころへうきてけ男も思分者よりさふりつとも知

て物くのくしつたくもあはれつとつふりあよ
 物さふりしを地とも祇もかほ海もく種りもさ
 とい人等と食唯祀と出小ちをたしあふす津あや
 ぶ小しめは白龍も魚腹もまへ極且つつよのり
 完物犬羊はけり皮流うりきと辨ん彼男海切
 小はれりやのりふるしをさふりくじきし鄙い
 たるい人づつをたもるぬべ一然ふもははは
 人悟世徳と知るの事同たりといひ諒下や
 了富山ふるまはれりも類りに香清く新語も

さるゆきとバズリといひく遠きせし遠近の人
多くがう診視と云ふ人よしく由がく客令壹夜群
集せしふ一ツ系法乃席のは習神神神よ出さ
富山の人もよとやて見しむ

名立明

知後玉金魚川と云はけのらに名立といふ驛
のりよ名立下名立と二つ小ふまはは敷多く家
建七大よしくひきあくる船昌のふなる下
よに南の山は負ひて小海は降る地なる物

に今年より二十七年山鬼よと名立れしあり山
二つ小つれて海中の家をいへ一驛り人馬翁大
くく海底に没入と云ふは山の内なる山あり
きくま白くく壁乃しくまう余も世存下名立
よ一高しつ西は人よ其ありし中もよと云ふ
はくまはゆきしよと云ふは名立の驛に海は
東がよの丸しよ漁船と云ふは其夜に
風静しよ天をよよと云ふは一驛
の者よと云ふは社をいへて籍録のたよ物

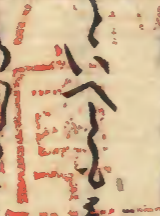
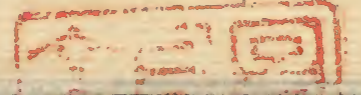
島の鯨乃船を沖をくつて物もつかぬに名を
 歌へ申八里も十里も出くはる物なり
 此方の舟の願も名をばおの角へへ一面は赤く
 なる 船火事しるふは火事大に騒ぎまじりや
 の焼くせぬ一人一刻もあやうくはらふ人の名我
 一と母とよきそ家に向うとよははのうらや
 一もがけをきあうふ火事ありやと向へどさ
 一と母とよきそ家に向うとよははのうらや
 目かへ申ふどいつ、園が裏の例の茶ぶりのと

舟よりよま時刻をやく戻さるるはかなしげは
 舟もいふく只一ツ大なる狭船とあつてよく音もえ
 一と母とよきそ家に向うとよははのうらや
 の山二つよまそそ海は洗へておどろりよと名を
 家は一軒もあつて火走り男女馬鶏犬まじり海の中
 のみかへ申なる一に申中よ只一人ある家計女房本
 乃枝のわらわあつて波のよほして命たもるぬありし
 一と母とよきそ家に向うとよははのうらや
 一と母とよきそ家に向うとよははのうらや
 一と母とよきそ家に向うとよははのうらや

山久野久住本乃人の河津をき通らざぬ越の長瀬
つるきあもあつとすの味よけあつと都達くあつと
細き山ありき

本山

小松の人越後とつよふち上越後下越後とよと
いふ高田領糸魚川領糸とよふに糸山とよふ山あ
りて其西の麓は園所あり其西は法海と云又樹海と
いふありて待合と云いけ候時いむし親香と人け
ふよふ言て篇とよふいひいしに若のあつと公也ありの



中くわくいあつと我もと樹海の上ぬく若と
其家の在りてわくの妙もくくもく人北は遠境
中ふ夫也もくくは成すはなぞとてあひ中く樹海
中いあつと登りあつとて山の上くけあつとあつと
よふ山の山は越後とつよふとけつと山は山と
いへよ若ぬの山とて山とて山とて山とて山とて
あかき山とて山とて山とて山とて山とて山とて
通一筋の山とて山とて山とて山とて山とて山とて
山とて山とて山とて山とて山とて山とて山とて



竹堂紀寧園

竹堂紀寧園

おくハ彫前乃平山嶽之甲此乃下絶頂之水田より
 農家ありそかいらまむけりてかみ汲水しきや
 実山しふべき
 九十九橋
 越前国福井乃町の山中より大野の川流る川より
 渡りて橋成はくも橋よりふ九十九橋とす其大と
 條の橋後七よりくまきり石橋なり石橋の太さ
 の天下に後ものなり
 常の橋より石と本と後今より橋は

いらぶるたしむるよは石橋とかなと付ハ大洪水の付全
 体にもに崩れそ、生れ無大さか、は中と本は橋よ
 せり中ハ大洪水の時本の不むり落て水浸まで、
 石の糸い恙なく、橋乃今体換、
 福乃造作公易し、大ふる橋、ゆの力橋、かくは
 きききよの橋、依常路の付、石の糸い、
 中ハ只本の糸よ、かた、
 又福井の糸、舟橋あり、
 中ハ只本の糸よ、かた、
 又福井の糸、舟橋あり、
 中ハ只本の糸よ、かた、
 又福井の糸、舟橋あり、

越中乃舟通川を富山の城下の所は、
 本大の、
 一々、
 水、
 上、
 柱、

の下名王ありて家ありて一と後よむありて
くまの

埴電

奥州仙臺に東小口に里に埴電といふ所あり
埴電の神とある地ありて此に名を以て
の地より家敷も千軒ありて婦女子ありて
仙臺を造り人の世の場なり海に傍り地
船も入りて村は埴電明神といふ所ありて
去る

よる水く一水人まき信一と月考或は講あり
杯とく九州人の家府の天神と云ふがごと
その意は神徳なりとも大なり又多し酒魚物
あるまや富りけ社の門と入りて方より袂の
地盤ありて細の蓋ありてその上に九輪の
ありて埴電の神と云ふ蓋も袂と云ふは蓋とい
袋乃水袂と云ふ真袂といふも蓋なりといふ
新物なり板火袋の前面の上は袂なり和泉三
帝忠衛殿白の文字ありて秀衛法守府將軍と

丁未時其子の二帝昇海せしと見えり具時
 佛母をくむく忍びく相とり世尊の
 は板板小書付する帳名文章は梵書の
 七の成なり君具せり書物讀下板も
 章へ東山園より代取及さる事くといひ
 大子感にいつたりといふ事と漢くんは
 舊紙の奥の細道といふ書は知る代
 通はさる事と書物に私交の事と知
 道はさる事と書物に私交の事と知

者かるにその誰か目もよまと思ゆ
 神代乃金銀の玉に白く其巾小谷
 水成澤小具瀬のを赤きあり青
 川の釜は海の色成異なり
 齋戒沐浴し世海と波
 何れもせよは愛美あり

毛くらしまらままくく身色とありは後世と人び
 ありありありとふる谷の大ききなり四尺餘深き徳よふす
 或は四五寸よふとせかう一ツの大小浅深ありしはつと七
 寸のドゥうは皆ま浅くし足さく鍔やぐ形た
 らばあて常し用ゆる不乃た盆乃てし全俸没して
 作らるるものし其物よふす中七ありまおん
 やれりぬ実小神代の舊物ありしと五るまふ年
 のおらありは後云は徳電明神上古の世け地よ後
 傳ましくてやくはたまは清多い海潮と意し後

とありしと人氏と教ふ今もまをまて天下に
 食ふるとして明神の徳成あり今に其時八金
 のありしとて後よふもあへくんとありまのなりしとて
 谷に甚なるしとて中くわ成ありし用よまへくも
 らに上古の世ありしとて新以山と人民開拓たると
 経のにおも用よまりしとて又金殿のこに
 新経よふし町家の裏よふし今年の外なる
 きりありしとて明神の徳とやとけいりし時其後
 河背負たりしとて今もありしとて後承石小化し

東遊記 卷之二

かゝるに云々... 揚州の石の寶殿と... 小舟物なり



東遊記卷之二

